

「全体主義一私達に宿るもの」

『全体主義の起原』、この本は第二次大戦

後間もない1951年にハンナ・アーレントとい

うドイツ系ユダヤ人の政治哲学者が著した書

物だ。彼女はナチ・ドイツの支配を分析して

いく中で、人間に何故あのような残虐な行い

ができたのかというショックと問題意識から、

本書を執筆した。具体的な内容は、全体主義

の分析とそれが生じた原因についてである。

では、何故全体主義の指導者はあれほどま

でに人々を魅了し、なおかつ人々を自分たち

の運動に組み込んでいったのか。また、何故

当時の人々は残虐な行いを容認するに止まら

ず、自ら積極的に加担していったのか。

その根底にあるものはすなわち、私達の心

の中にもあるこの世界に対する寂しさと怨恨

である、著者は結論づけている。私は最初、

このあまりにもシンプルな答えに驚いた。それと同時に強く共感した。何故なら、世界や周囲から孤立し、寂しさや恨みを抱える人間は、何か強い存在や自分を受け入れてくれる存在を求めるからだ。当時の困憊しきったドイツやロシアの国民にとって、その存在が偶然にもヒトラーやスターリンだったのだ。

これは現代にも十分当てはまる。過剰な資本主義の下、人々は絶えず自己革新を迫られ、

形式だけの個人主義によって、核家族化や無縁社会が進行する。一方で、組織や家族の中で同調主義の圧力に潰されていく。従って、

民主主義や資本主義でさえ、全体主義化する可能性は十分にあり、日本とて例外ではないのだ。私はこういった全体主義の雰囲気を目撃する生活の中で感じ取ることがある。それは、

通 学 中 の 電 車 内 の サ ラ リ ー マ ン や 学 生 の 、 先
行 き の 見 え な い 不 安 や 様 々 な 圧 力 に よ っ て 疲
弊 し た 表 情 、 あ る い は 一 人 で 過 ご す 昼 食 時 や
就 寝 前 に 、 自 分 の 心 の 中 に ふ と 現 れ る 孤 独 感
や 閉 塞 感 な ど だ 。 こ の よ う に 、 全 体 主 義 は 縁
遠 い も の で は な く 、 私 達 一 人 一 人 の 心 の 中 に
あ る も の な の だ 。
以 上 の こ と か ら 、 私 は 本 書 を 日 本 の 人 に 、
特 に 、 こ の 世 界 に 対 し て 並 々 な ら ぬ 孤 独 や 不
安 を 抱 え て い る 若 者 に 薦 め る 。 難 解 な 書 物 で
は あ る が 、 本 書 は 全 体 主 義 が 生 じ る 原 因 や 背
景 を 述 べ て い る と 同 時 に 、 結 論 に 全 体 主 義 へ
の 対 抗 手 段 も 述 べ て い る 。 そ し て 、 そ の 結 論
は 驚 く ほ ど シ ン プ ル で あ り な が ら 、 私 達 の 人
生 を 豊 か に し て く れ る 糸 口 で も あ る と 、 私 は
感 じ た 。 本 書 が 、 全 体 主 義 へ の 理 解 を 促 進 し 、
ま た 読 者 の 皆 さ ん の 心 の 行 き 詰 ま り や 不 安 を
解 消 す る き っ か け に な れ ば 、 幸 い で あ る 。